

新島八重を介して生まれた
千家と同志社との絆

皆様、ご機嫌よろしゅうございます。今日は京田辺の同志社の校舎にお集まりいただき、こうしてお目にかかれまして大変ありがたく、嬉しく存ずる次第でございます。新島八重先生と新島襄先生共に大河ドラマ「八重の桜」で取り上げられていまして、いよいよこれからクライマックスです。それにあたりまして今日は、新島八重自と裏千家との関係につきましてお話ししたく思います。

私は千家に生まれまして、後々に新島八重刀自が裏千家の大変なお弟子さん、大変な師匠であつたことを知りました。もちろん子どもの時は、そんなことは全然存じません。

私と同志社との出会い、は物心ついた頃でした。同志社幼稚園を出た後は京都師範学校附属小学校で学びました。その次は府立第一中学校で当然受験するものだと思っておりましたら、ある日、父に呼ばれました。私の顔をじつと見て「あんた同志社に行きなさい」と言うわけです。もう青天の霹靂です。裏千家はれっきとした禅宗なのに、耶蘇教のアーメン学校なんか行つてどうなるのだ。私はいやだ。と初めて父に反抗したことを覚えています。

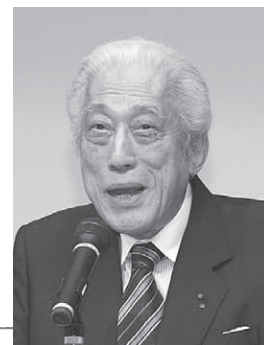
レクチャー

講演会・シンポジウム 「八重と裏千家」

基調講演
新島八重刀自と茶道

茶道裏千家 利休居士第15代前家元

千 玄室氏



すると父が一気に険しい顔をいたしまして、「私も同志社の出身だ、同志社と千家との関係を話すから聞きなさい」と言いました。そこで初めて新島襄先生という人が同志社を創られ、その奥方が八重刀自であり、その八重刀自が、私の祖父である13代圓能齋の直弟子となり、昭和7年にお亡くなりになりますまで師範としてこの活躍なさったことを知ったのです。荒神口に屋敷があり、「寂中庵」というお茶室もある。この庵号は私の祖父がつけました。「和敬清寂」の「寂」ですね。「寂」の中に「寂」がある。すべて「無」、無心になる。大変哲学的です。「宗竹（そうちく）」というお茶名もその時初めて聞き、そういうふうな裏千家の茶道に大変寄与された方であると聞きました。

八重刀自は武家の娘ですから、お若い頃からお茶はもちろん、お花もお香も弓道にしろ、武芸百般といえますかい。いろいろなことを心得させられたのです。それがために私の祖父、圓能齋と出会った。圓能齋がまだ23、24歳の時です。新島襄先生が明治23年にお亡くなりになった後は無聊をかこつよりも何かしないといけないということ、看護の道を選ばれると同時に、お茶の道へ入られたのです。

徐々に実感していった
同志社の校風

私がそうして父に反抗しながら同志社中学に入学したのは、昭和11年でございました。私は仏教徒でございますから、小さい頃から毎日、立休居士の御像、亡くなられた歴代と尊族の皆様にお膳をあげたりお経をあげたりしないといけない。禪宗のお経などはそんなじておりませんでしたし、小学校の頃は木魚を叩いてお経を唱えておりました。それが中学ではチャペルの鐘が鳴ると同時に、同志社教会へ1年生から5年生まで全員が入って礼拝をいたしました。当時は堀という牧師がおられ、まずお祈りをされます。それからバイブルを読まれます。讚美歌を

歌います。雨の日も風の日もチャペルでの礼拝が終わらないと、授業が始まらない。先生は全員クリスチャンでした。

特にキリスト教でも同志社はプロテスタント、しかも自由主義の教会でございまして、チャペルにはカソリックのようすに十字架やマリア様などの像があるわけではございません。がらんとした所にステンドグラスだけが非常に美しく、聖壇にも十字架はない。それで1、2年経ってきたらしだいに同志社の校風が分かってまいりまして、これが新島先生の教えになつてゐる校風の一つのなかなと思つようになりました。

「丈夫の起こり来らんことを」。先生方は「君たちは選ばれて同志社へ来たんだ」新島先生の教えをしつかり心に留めなさい。

い」と言われた。そして「立派な人物になれとは言わないけれど、人様に対して嫌な思いをさせない人間になりなさい」とも言われた。そういうことを伺ってから、2年生くらいの時に、父に「申し訳ありません、同志社に行つてよかつたと思います」と初めて言いましたら、父が「それはよかつたな。これで圓能齋、私おまえと、同志社にご縁ができた」と。後に私の息子も同志社にお世話になりましたから、4代続いて同志社とご縁ができたのでございます。

英語教育についても素晴らしいものでありました。中学ではアメリカの先生方や二世の先生もおられ、クラスメートも国際的でした。ハワイの二世、ブラジルの二世、当時は満州国がありましたから

中国から、そして朝鮮半島、台湾、香港と、32人の同級生のうち十数人が外国からの留学生でした。そういう友人が、いろんな付き合いの中でいろんな話を聞かせてくれる。あるいは二世の級友は見事な英語を聞かせてくれる。

戦後に進駐軍が来た時は、うちの茶室をのぞいてみると、父が英学校で習った英語で「和敬清寂」の説明をしていたのです。将兵たちが正座して、お茶碗を見ておもしろじろしている。それを見て、戦争には負けたが文化的には勝ったなと思いました。父が『Make yourself at home,

略歴 千 玄室（せん・げんしつ）氏

大正12年京都府生 幼稚園・中学・予科と一貫して同志社で学び、昭和21年法学部経済学科卒業。その後、ハワイ大学修学。韓国中央大學校大学院博士課程修了。文学博士。昭和39年千利休居士15代家元を継承。裏千家今日廬庵主として宗室を襲名。平成14年嫡男に家元を譲座し、千玄室に改名。「一盃からピースフルネスを」の理念を提唱し、国際的な視野で茶道文化の浸透と世界平和を願ひ、各国を歴訪。文部省社会教育審議会委員、大学審議会委員、中央教育審議会委員等の公職を歴任。現在の主な役職にユネスコ親善大使、日本・国連親善大使（外務省）ハワイ大学教授、公益財団法人日本国際連合協会会長、公益社団法人日本馬術連合会長、学校法人同志社社長、同志社スポーツユニオン顧問、同志社校友会会長、文化功労者国家顕彰、文化勲章、芸術文化勲章コマンドールレジオン・ドヌール勲章オフィシエ（フランス）、大功勞十字章（ドイツ）、UAE連邦独立勲章第1級等受章。京都市、ボストンホノルル等国内外で名誉市民、名誉博士号を多数受けている。

comfortable please」と言うところを将兵が喜んで足を伸ばし、父は凄いものだと思いました。同志社の英学校で明治の終わり、大正の初めにもよくこれだけの勉強をさせてもらえたな、と同志社の素晴らしさをその時にしみじみと感じました。

私は新島襄先生の足跡を歩いてみたことがございます。アーモスト大学で先生は苦勞しながら、皿洗いをされたり教会へ熱心に通われたりして、奇様な方々との出会い、奨学金を出していただいた。苦勞された新島先生の人柄に対して、アメリカの人たちが非常に感動した。この人なら本当に日本を背負っていく立派な人物になるであろうということが、当時のアメリカの人たちにも分かったのであらうと思います。

私が1951年にアメリカへ行き、また時、同志社英学校で学んだ私の父の友人、カミデさんという牧師さんにお会いしました。同志社の校友会の会長などをしていらつしやった方です。そこでいろいろなお話を伺った時に、こうおつしやつたことが今も耳に残っています。「ええ、そやから同志社というのは世界中どこへ行っても通じるんやぞ」と。その時、やはり同志社に行つてよかったな、と新島襄先生のお気持ち、アメリカに渡つて初めて分かりました。

心にお茶をやつていただいたのであります。

**キリスト教精神と
通じ合う「お茶事」**

茶道では正式なものを「お茶事」と言います。この場合、本来はお濃茶です。利休の時代からお濃茶が正式に取り入れられたわけでございます。お茶碗にお茶をばーつと入れて、攪拌する。どろどろのお茶。それを三口半飲んで隣の人に廻

八重の行動が 学校茶道普及の契機に

私の父の妻の母、つまり私の祖母は仙台の生まれです。伊藤幾久寿といい、昭和26年に99歳で亡くなりました。仙台です。当然会津とお近くです。明治御一新の時には両藩とも御一新に桶突き、新島八重刀自は山本八重である時に鉄砲方として活躍されました。祖母も戊辰の戦いの時は17、18歳で、官軍と戦つたと話しております。長刀を持ち、武家の娘ですから討ち死にを覚悟で戦つた。この祖母が、私が中学生時代に仙台からやつてきますと、よくお茶のお稽古をつけてくれました。ある日、祖母から「宗竹さんの話を聞いているか」と言われました。もちろん私は同志社へ行つておりましたし、父からも母からも八重刀自のお話は聞いておりました。それからもだんだん勉強していく間に、いかに八重刀自が教育者としてだけではなく、本当に人間味のある温かい方かということが分かりました。

今「学校茶道」と言っていますけれども、一番最初に学校に茶道を取り入れていただいたのが八重刀自なのです。八重刀自は今の冷泉さんのおうちの並びにあった華族会館に出入りしておられました。が、私の曾祖母である猶庭子も華族会館

していきます。

どんな人でもお茶室に入つたら身分の上下はなく、みんな一緒です。大名であろうが侍であろうが百姓であろうが町人であろうが、お茶をいただくためにここへ来た人はみんな平等だよ、ということになります。ですから、どんなに偉い人でも帯刀は許されなかった。茶室の外から刀掛けに刀を置き、丸腰で小さなじり口から入ります。なんであんな小さい所から出たり入つたりしないといけないのか。そこでいちいちお辞儀しなさいよ」と言われなくても、入ろうと思つたらどうしても低頭しないといけない。お辞儀するのがいやだつたら、いつまで経つても入れない。誰でも扇子一本持つて低頭して、あのにじり口から入るときに、初めてそこで自分の「無」を知ります。

人間は本来無位である、位も何も無い。二無位真人（いちむいのしんじん）、位の無い真の人という意味です。真の人間とは裸です。生まれたときは裸です。大人になつていろいろお金が貯まっても死ぬときは何も持つていきません。また裸になつて死んでいく。それを利休居士は教えたのです。そして、どんなに偉い人でも隣の人にお先に「いかがですか」と勧め合う。濃茶は「美味しい」と言つて自分だけが全部飲んでしまつたら困る。だから三口半ずついただいて、飲み口を

でお茶を教えておりました。

当時、婦女子の教育のために女紅場が創られていて、これが後の京都府立第一高等女学校、今の鴨沂高校です。そして京都市が市立第一高等女学校、後の堀川高校を創つた時、「女子教育にぜひ茶儀科を設けないといけない」と建白されたのが新島八重刀自でした。婦女子は茶道を第一番にたしなみ、お花、香道、料理もできないといけない。そして私の曾祖母と一緒に京都市と市に嘆願され、今の鴨沂高校と堀川高校に全国で初めて茶儀科を取り入れたのです。それから全国津々浦々で、ご婦人方の教育として茶道が盛んになった。それまで茶道は武家社会のものでしたが、婦女子の教育に開放された。その一番の大立者が新島八重刀自だったのです。

八重刀自は裏千家で一番位の高い奥秘まで修じられた方でした。喜寿の時にお造りになった手造りのお茶碗とか、自分でせつせと削られた茶杓が、今も10本ほど残っているようです。アメリカン・ボードから来られたデントン先生も新島宗竹先生に弟子入りされ、私どもの今日庵にもおいでになりました。「伝」はデントンの「デントン」先生も大変お茶を好みました。そうした関係で、同志社の女学校でも熱

清めて隣へ回す。

今「もてなしの心」という言葉が盛んに言われますが、450年前に利休居士は「いかがですか」「お先」という、もてなしの心を教えました。どんな偉い人でもそういうことが言えなければだめです。謙虚にならないといけない。一歩下がって「いかがですか」と言えば、争うことはないのです。お互いに一歩ずつ進み合うからぶつかり合う。ちよつと下がればいいのです。それをお茶の精神で教えている。これは八重刀自も自分のお茶の日記に書いております。「お濃茶こそ本来の茶なり」と。このお濃茶を飲み分けるのはキリスト教の精神と同じである。

私はそれを読んでびつくりしました。同志社で学んだ私は、お蔭様でこの国へ行きまして、教会でお献茶奉仕ができます。仏教徒とかそんなことは忘れて一碗のお茶を、あらゆる国の宗教の教会で捧げることができる。そこには何の隔たりもありません。朝はお経を読んで木魚を叩いてご先祖に拝礼しますが、教会に入れば大きな声で讃美歌を歌います。牧師さんのお話を聴き、これはマタイ伝のどこにあったとか、覚えさせていたいています。これだけキリスト教が頭の先からつま先まで入っている仏教徒も珍しいですね。やっぱり私は父に感謝し、



新島先生に感謝します。

新島宗竹先生が書いていらつしやるように、一碗のお茶というのはそういう意味で非常に大事な、人間の心を休めるもの、やすらぎなのです。お茶さえ心得ていたら「おもてなしの心」なども、ことさらに言うことはないのです。日本人はみんな優しい気持ち、勧め合う気持ちを持つてゐるのです。

一碗のお茶をもって 世界平和のために働く

実は私は同志社大学へ進む時に、東京へ出たくて学習院高等学校を受けて合格しましたが、母から絶対に京都に残るよう懇願されて同志社の予科へ進んだのであります。大学も、何も文学部へ行かなくても他のことを勉強しようと思ひ、法学部経済学科へ進みました。

ところが昭和18年、2年に進んだ時に徴兵適齢期にかかりました。当時法文系の学生は全員徴兵検査を受けることになり、理工系の学生には将来のために徴兵を猶予することになっておりました。私は学徒動員で海軍に入隊することになり、土浦の航空隊で士官教育を受け、徳島の航空隊の実戦部隊で飛行訓練を受けました。

のちに水戸黄門役で世間をうならせた西村晃とコンビを組んでやってまいりました。

して、昭和20年4月27日に徳島の航空隊では特別攻撃隊が生まれ、私も白菊特別攻撃隊の一員に選ばれました。私はお茶の家の息子ですから、父から携帯用の茶箱を持たされておりました。みんなも何かという「千、お茶にしてくれ」と言う。配給の羊羹でお茶を一服点てると、みんな「美味いなあ」と涙を流してくれました。

最後は5月22日に徳島を出発しまして、九州の鹿屋基地に集まり、徐々に皆出てまいりました。私は残され、皆に「最後の別れやな」とお茶を一服点ててあげた。皆「お母さん」と叫びながら故郷の方を向いて敬礼して、「靖国で待つぞ」という言葉を遺して出てまいりました。627柱、まだ沖縄周辺の海底に眠っております。その連中のためにも、私はこうやって生かさせていただいていま

最後に私は命令を取り消され、松山の基地へ戻り、西村と私は命拾いをした。

申し訳ない思い、忸怩たる思いで、私はまだ生きています。この69年間、私はその思いばかりで、一碗のお茶をもつて少しでも世界平和のためになればと生きております。同志社の建学の精神「良心を手腕に運用する丈夫」までは行きませんけれども、丈夫として一碗のお茶をもつてお役に立てればと思ひ、63カ国、

もう320回くらい海外へ出ています。

それは私があの戦争の生き残りであり、また新島襄先生の大きな建学の精神のもとで学ばせていただいた良心に沿うべく努力しようとしているからです。生き残ったことだけは申し訳ないという思いであれから69年間、毎日生きてきました。

私にとつて、まだ戦争は終わっていません。私が亡くなったと同時に私の戦争は終わるでしょう。ですから私は息子たちにも「本当にもう平和ボケの中にみんな浸かり込んでゐる」と言っています。新島先生が生きておられたら、どんな気持ちで今の日本を眺められるだろうかと。

教育もお茶事のご精神で

先ほどお茶事のお話をいたしましたがお茶事ではお濃茶を中心にして懐石があります。「懐石」というと特別なお料理のように思われますが、そうではありません。なぜ懐石と言うようになったかご存じでしょうか。

私は復員後同志社大学を卒業してから1年間、家元を継ぐ資格をもらうために大徳寺で修行をいたしました。僧堂に雲水として入りましたが、これは軍隊よりきつかった。軍隊は食べるものはきちっともらえますが、僧堂ではいただいた布施だけで賄います。大根の煮たのと季節の野菜ばかりで、朝はお粥に味噌汁、

たくあん二切れ。薄い薄い、顔が映くらぬのお粥です。もうお腹が減つてお腹が減つて。10時ぐらいに老師以下みな出られて、総茶礼というのがあります。これはお饅頭をいただいてお茶をいただくので美味しい。その後は草むしりなどを無心になつて行い、公案の答えを老師方に聞いてもらう。夜は8時半に寝て、朝は午前4時には起きる。せんべい布団一

枚の生活。お風呂もたった一杯のお湯で始末しないといけない。なかなか苦しい修行でした。

朝の作務で掃除をすると、冬は落ち葉をためておいて焚き火をします。そこへ手ごろな石を持ってきて入れておく。火が消えて夕方になると、暖まった石を懐に入れて暖を取つたところから懐の石、「懐石」という言葉が生まれました。だからお寺の一汁一菜が懐石のもとなのです。贅沢なものではありません。覚えておいてください。この懐石がお茶事の中に取り入れられ、懐石料理が生まれたのです。

お茶事のお濃茶は、まず湯加減が大事です。お濃茶は飲み回しますから、最初は熱いのがいい。だいたい80度くらい。だから三口半で飲んでいただくのが作法だと言われる。お濃は一人ひとり飲んでいただくから70度くらいがいい。三口ずつでなくてもいいのです。「お先」「いただきます」という言葉だけ忘れないでいただきたい。そしてグリーンの色と一体となつて、じっくり味わっていただきたい。この大自然の地球の緑と、このお茶の色は一緒です。だからこの丸いお茶碗は地球だと思つて、「ありがたいな。幸せだな。平和だな」という気持ちで一服のお茶を味わっていただきたい。作法とかよりも、そういう気持ちで始めてくだ

さい。ご自分の好きなように点ててお飲みください。私は90歳まで生きておりますけれど、毎日お濃茶をいただいております。カテキンだらけです。母のおなかの中からお茶を飲んで生まれてきたのです。ですからお蔭様で、かくのごとく元気にやつております。

京田辺の一带は本当にお茶どころです。いいお茶を作るために、皆さんどれだけ苦労されているでしょうか。お百姓さんに一生懸命作っていただいたお米を「美味しい」「ありがたいなあ」という気持ちで食べていただき、美味しいお茶を「あ、いいなあ」と飲む。一碗で心の飢えを癒やす。まったく砂漠の中のオアシスだな、という気持ちで飲んでいただきたい。お茶によつて平和な気持ちで生まれるように、同志社においても新島先生ご夫妻のお心を、今また改めて思い出していただきたい。

先生も生徒もみんな「いかがですか」という気持ちで授業を始めて、「ありがたうございました」という気持ちで終えていただいたら、内容の高い、素晴らしい教養がもつとこの京田辺から発信されていくのだと思います。私も何とかまたお力添えをしたいと思います。本日はありがとうございます。

(2013年11月4日、京田辺校地・恵道館201号教室にて)



プロテスタントと「良心」との関係

本日は同志社における「良心」というテーマについて、私の視点から少しご紹介したいと思います。我々は「良心」という言葉を聞くと、通常の日本語として「良い心」という意味を、一人ひとりのイメージにそって抱きます。ただ同志社における良心は、もう少しニュアンスが違います。

そのお話をする前に、キリスト教の歴史を簡単に見てみましょう。およそ20世紀前半頃まで、キリスト教世界は大きく三つの潮流に分かれていました。東ヨーロッパ、とりわけギリシャ、ロシアに広まったキリスト教を一般に東方教会、日本ではギリシャ正教、ロシア正教と言います。もう一つは西ヨーロッパに広まったキリスト教で、一般にローマカトリック教会、あるいはカトリック教会と呼ばれています。そして16世紀になると、ドイツの修道士であり学者であったマルティン・ルターを中心に宗教改革が起こり、カトリック教会から分派が出ました。これがプロテスタントのキリスト教です。

たちに議論を呼びかけました。「95カ条の提題」がそれです。しかしカトリック教会はその議論の内容を肯定せず、ルターは宗教改革運動開始後3年余り経って、カトリック教会から破門されてしまいました。異端宣告を受けてしまったのです。破門されたルターは神聖ローマ帝国の帝国議会に召喚されて尋問を受けます。そして帝国から断罪され、帝国の法律の保護外に置かれてしまうのです。つまり誰かがルターに危害を加えても、危害を加えた人は法律で罰せられないという、極めて危険な状況になりました。

帝国議会の尋問記録が残っています。ルターはどのように証言したか。「私は聖書の証言によって、あるいは明白な真理によって論駁^{ろんぱく}されないならば、私があげた聖句と神の言葉にとらえられた良心に服し続けます。私は何も撤回できないし、撤回するつもりもありません。良心にそむくことをするのは誠に難しいことであり、無益であり、危険なことであるからです。神よ、助けたまえ。アーメン。」そのような物の見方から始まったプロテスタント的なキリスト教の精神に常に流れ続けているのが、良心という言葉なの

レクチャー

良心教育に関するシンポジウム 基調講演

良心教育とは

同志社理事長・大学神学部長

水谷 誠



同志社のキリスト教、つまり創立者新島襄がアメリカで触れたキリスト教は、そのプロテスタントのキリスト教のうち、とりわけイギリスなどで現れ出た教派がアメリカのニューイングランドに渡って大きく発展したものです。一般に会衆主義のキリスト教会と呼ばれます。新島はアメリカで、この19世紀後半頃のニューイングランドの会衆主義のキリスト教に触れ、そのキリスト教的精神を身に受けて日本に戻ってきたのです。

同志社はキリスト教主義、自由主義、国際主義という教育理念を掲げています。自由であることや自治自立という概念をととても大切にしています。こういう物の見方は、同志社の標榜する良心教育と密接に関係していると言えます。その背景となるのは、プロテスタント的なキリスト教の精神です。

プロテスタントのキリスト教と「良心」という概念との関係について、非常に印象深いエピソードがあります。宗教改革のプロセスを少しお話ししましょう。16世紀の初め、マルティン・ルターは当時のカトリック教会の物の見方に違和感や疑問を覚え、カトリックの有力な神学者

です。聖書の使徒言行録にも、次のようなパウロの言葉があります。「兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました」。

「良心」の語源

日本語における良心は「良い心」と書きます。国語辞典『大辞林』は、孟子の文に「良心とは、人本来の善なる心である」という表現があると説明しています。「日本国語大辞典」には「良いと信じる」ところに従って行動しようとする気持ち」とあります。そう考えると、そういうものだろうなと我々は納得します。日本語における良心、漢文のテキストからやってきた言葉と、キリスト教的あるいはヨーロッパ的な良心の概念。これらは結果的によく似ているかもしれませんが、しかし、少し違うニュアンスがあります。

「良心」は、英語ではconscienceです。1871年、中村正直がイギリスのスマイルズという人の本を『西国立志編』として訳した時、conscienceの訳語に「良心」という言葉をあてはめました。しかしアルファベットを見直すと、conscienceという言葉に「良い」という意味

合いはありません。

もともとconscienceはラテン語のconscientia（コンスキエンティア）という言葉に遡ります。conscienceをconとscienceに分けてみましょう。scienceはサイエンスであり、元来は「知る」という意味です。conは「共に」という意味。conscienceの元になるラテン語は、本来「共に知る」という意味です。ギリシャ語で書かれた新約聖書ではsinedesis（シネイデシス）という言葉であり、これも同じく「共に知る」という意味です。横文字の世界には「良い良心」あるいは「悪い良心」という言葉もあります。すると「良い良心」は日本語では冗語になり、「悪い良心」には言葉の論理矛盾が起きてしまいます。

我々は良心という言葉を使えば「良心の呵責」「良心に責めさいなまれる」というふうに使います。自分自身がしてかしてしまったことについて、それは良くなかったのではないかと心がうずくような場合に「良心の呵責」という表現を使います。我々が良心という言葉を使っていると、どうも居心地が悪い。自分の振る舞いを見返して、気持ちが悪く活になれ

ないのです。

しかし先ほどお話ししたように、パウロは「あくまでも良心に従って神の前で生きてきました」と言いました。これは、しでかしてしまったことに対して良心が向かい合うということではなく、今あるいはこれから、自分はどういうような人生を選んでいくのかという形で使われています。聖書あるいは元来の横文字の良心という言葉には、ネガティブではなくポジティブな仕方、良心と照らし合わせて自分の道行きを考えていくという側面があるのです。

何と「共に」なのか

では、キリスト教的なConscienceとは何なのでしょう。そこで今一度、「共に知る」という言葉の意味を考えてみましょう。これは哲学や神学の歴史の中で何度も論議されてきて、いろいろな解釈があります。私はこう理解しています。一つは「自問自答すること」です。自分のこれからの振る舞いについて、自分自身が自分に問いかける。「自分」と「もう一人の自分」が「共に」知る。衝動的に何かをやってしまったという気持ち

に襲われたときに自分の気持ちを押しとどめ、落ち着かせようとする。自問自答には、成熟した人間が日常生活を送っていく上で非常に大切な要素があります。

さらに聖書的、キリスト教的に理解してみよう。そこには、悩みの中にある自分という枠を抜け出て、その外にある超越的な存在、つまり神との関わりの中で何事かを定めていこうとする姿勢があります。そこにキリスト教的な良心理解の特徴があります。例えば祈りという振る舞いがあります。祈りは常に、自分が神に語りかける、呼びかける、問いかけるものです。あるいは自分の出来事について報告する。神と語ろうとする姿勢が基本的に祈りの精神であり、自分が現在悩んでいることについて神に語りかけ、応答を求めようとするところに、祈りという振る舞いがあるのです。

基本的にキリスト教の物の見方は人格関係の中で成り立っています。自分が誰々と対話をするという形です。聖書には神話的な表現が随所に出てきます。例えばアダムとエバが神様と話をしたり、蛇と人間が話をしたり。これらは基本的に、対話性がキリスト教の大きな特徴で

あることを示しています。

私の友人に曹洞宗のお坊さんがいます。神学部で私の1学年下に学び、大学院の後期課程まで行き、約10年間聖書を研究していた人です。10年経って彼が出した結論は、どうも自分にキリスト教はそぐわないというものでした。そして彼は禅宗の寺に入ったのです。その後、彼にこんな質問をしたことがあります。曹洞宗で本当に悟りというものはあるのかと。彼は「分からない」と言いました。ただし座禅をしている間に、人間は常にその時々思いにとらわれている存在であることが分かったそうです。毎日座禅をしていて外に出られない。その時「饅頭が食べたい」と、頭にふと浮かんだ。すると、その気持ちから離れられなくなる。食べられないから食べたいと思う。それが一日中続き、二日目、三日目と消えない。そしてある時ふと気分が変わり、また別のことにとらわれて離れられなくなる。

人間は衝動的な欲求であれ世間であれ名誉欲であれ、毎日何かの思いにとらわれて生きていく存在です。それは曹洞宗だけでなく、キリスト教でもまったく

同じです。その上で、この世界で人間を引きつける様々なものから少し離れ、この世界を超えた存在に問いかけて答えを求めようとする。そういうところにキリスト教的な良心の理解があるように私は思います。

私たちは難題に直面した時に、友人、



家族、教師に意見を求め、相談します。その中で概ね妥当であろうという結論を最終的には自分で定め、その判断に従っていきます。成熟した人間として当然の振る舞いです。しかし自分と周囲との関わりに付け加えて、この世界を超えたものに問いかけて応答を求め、自分で決断をし、自分のスタンスを決めていくところに、キリスト教的あるいは同志社の良心の理解があると思います。

同志社の「自由」「自治自立」と「良心」の関係

しかしこれは、形式的な理解です。例えば同じようなテーマで悩む二人がいるとします。問いかけをして悩みながら答えを求め、何らかの決断をしたとき、一人は右へ進み、もう一人は別の方へ進んでいくこともあります。マニュアルのようにはつぎの答えはありません。そこで真摯に誠実に考えてみるところに大きなポイントがあるのです。

この良心に基くということは、先ほど申し上げた自由、自治という言葉と大いに関係があります。神様に応答を求めて考え、決断するのは自分です。これが一

番適切だろうと思い定めて、その中で生きていこうとする。その人は自治、つまり自分をコントロールしているのであり、自立、すなわち自分で立とうとしている。しがらみの中で生きているのではなく、自由な生き方をしている。キリスト教的な、この世界を超えたものと対話を試みの中で、自由に自分を治めて自分で立っていく。良心と自由、自治自立とは互いに関係している概念なのです。

最後に、そのような物の見方の中で具体的にどのような進み方があるのでしょうか。その事例として私は新島襄の生き方を思い浮かべます。新島の葬儀で勝海舟が幟に揮毫した言葉のように、新島は「我らは世に与えんと欲す」と、常に考えていました。新島が好んだ聖書の言葉にこういうものがあります。「受けるよりは与える方が幸いです」。彼はキリスト教的な良心の理解の中で誠実に考えた結果として、そのような具体的な生き方を追求した人であったのです。

(2013年11月14日、大学今出川校地良心館107にて)

求め続けるプロセスを
大切にする

加賀 ● 先ほど理事長から同志社の良心、キリスト教の良心概念について、非常にわかりやすくお話しいただきました。村田先生、木村先生、今の講演につきましてコメントをいただけますか。

村田 ● 良心とは超越したものとの対話というお話がありました。私が尊敬するアメリカの神学者に、ラインホルド・ニーバーという人がいます。彼のキーコンセプトの一つに「incongruity」、「不一致」という言葉があります。人間は善であり、なおかつ悪である。人間は必ず死ぬけれどスピリットは永遠である。その不一致の中で祈りというものは生じるのだと。今日のお話を聞いて、私は同じような感想を持ちました。

同志社の魅力は、実に多様な人たちが集まっている点でしょう。多様性に対する感性、異なる価値観に対する感性は、同志社が今後さらにグローバル化を進めていく上でも非常に重要です。しかし価値観や文化が多様であって様々な見方があるだけでは相対主義に陥ってしまい、人間は物事を判断できなくなります。他方

思想、建学の精神。これらの根底にはキリスト教があり、それが彼を動かしていたことを再確認するチャンスになりました。

加賀 ● お二方のお話について、改めまして水谷先生から伺いましょう。

水谷 ● 今回の木村先生のお話で言うと、我々は日常生活で何を判断するため、どういう判断の仕方をしているのかというのが、良心のポイントだと思います。実は今日、私もルターを取り上げることにしては少し悩みました。ルターは生死に関わることで「良心」という言葉を語りましたが、我々が同じような場面に直面することは滅多にないので、ルターの話は少し重すぎるなと思った次第です。村田先生のお話については、キリスト教的に言うと人間は不完全です。人間のつくり上げたものは、よいものとしてつ



加賀裕郎
女子大学長

レクチャー

良心教育に関するシンポジウム パネルディスカッション

同志社の良心教育

パネリスト

水谷 誠 同志社理事長・大学神学部長

村田晃嗣 大学長 木村良己 中学校・高等学校長

コーディネーター 加賀裕郎 女子大学長

くったとしても完全であることはあり得ないというところから、すべての物の見方は出発します。その中で、できる限りよいものに近づけていくとして、我々は旅人として、ある目的に向かって歩む同志社で言うと、我々は建学の精神を目的として、様々な形でそこへ向かって歩んでいくプロセス存在であるのだと思います。

村田 ● アドルノというドイツの美学者は、愛とは異質なもののの中に同質なものを見出す力であると言っています。これも先ほどの「不一致」に通じるところがある。新島の魅力とは、強い信念を持ちながら、しかし常に悩んできたところだと思っています。同志社を育てたい、自立したいけれども、アメリカンボードとの関係に悩んできた。京都という地に学校を創ろうとして、いろんな勢力との綱引きの間で悩んできた。国禁を犯してまでアメリカに渡った新島の決意や信念に我々は憧れを感じると同時に、しかしいろんな場面で悩み苦しむ新島に共感します。同志社の歩みも同じです。その振幅みたいなものが却って魅力ではないかと思えます。

木村 ● キリスト教は、基本的に弱さをどう受容していくかという宗教だと思いま

で、多様ではあるが人間である限り、普遍的の価値観みたいなものがあるのではない。人間が共通して持てる真とか善とか美というものがあってもいいか。それらは人間が一生もがいてもくっついて見つかからないけれど、普遍性に対する探究心は必要だと思います。ここには基本的に不一致がある。だからこそ我々は祈らなければならぬ。そこに神との対話が生ずるのだと、お話を伺いながら感じました。

木村 ● かつてジェフ・バークランドさんが同志社高校を辞める際、話し合ったことを思い出しました。その時、彼は「日本人は祈りが重すぎる。特に牧師の祈りが重すぎる。」と言っていました。彼も「祈りとは対話である」と言います。しかし水谷先生のお話よりは、もう少し身近なイメージです。例えば道に迷ったとき、左右どちらに行くか。「神様どちらですか」と問い、何となくふつと自分で決断して右に曲がる。日本では祈りというところ、どこか仰々しいイメージがありますが、もっと日常的なレベルのものなんだと教えられました。それから新島がキリスト者であったことを、あらためて再認識しました。学校創設という彼の夢、

す。人間は動物ですから本能的に強さを求める。しかし人間は弱い存在で、常に悩んでいる。それはかつて悪いことではなく、人間として当たり前のことなんだというスタンスは、同志社がこれからも大切にしていかなければいけない。弱さを持った者同士がどう絆を結んでいくか。そこに、同志社の拠って立つ原点があるのではないのでしょうか。

それから、良心というと心の奥底にしまい込んであるイメージがありますが、新島は「良心を手腕に運用する」「良心の全身に充滿する人物」という表現を使っています。良心は、ただ持っているのでは済まされないのだという新島からの問いかけです。良心を活用していく、生きるときに使い込んでいくことが、一人ひとりに課せられた課題かと思えます。

加賀 ● 良心とはむしろ外に出ていくものの。アクティブな面を持っているのです。大変貴重なご指摘でした。ところで先ほど水谷先生は、良心の定義は形式的なもので中身は問わないとお話しされました。たとえば、キルケゴールも神と対話した人です。その場合の真理とは主体性だと思ふのですが、やはりもう一つ、中身の、異質の普遍性というものを、キリ

スト教との関係でどういうふうに理解すればよいでしょうか。

水谷 ●キリスト教は日本ではマイノリティーですから、同志社の教職員や学生の大多数は基本的にキリスト教以外の世界で生きている人々です。加賀先生のご質問のキリスト教的内容については、新島襄の「受けるより与える方が幸いである」という物の見方、聖書の中の思想ですね。キリスト教的に言いますと、聖書の物語になじんでいる中で自分の発想がだんだんそれに近づいていくということなのかなと思います。キリスト教徒でない人にとっては、自分なりの仕方で超越的なものに関わるという発想でもいいかもしれません。仏法に従うということも当然あるでしょう。良心概念を非常に幅広く取りますと、つまりは眞摯に誠実に問いかけて、答えを求めようということだと思います。

基本的に、そういう物の見方は多様性につながるわけですね。こうでなければいけないということではなく、決めた結果より、決めるプロセスに重大な意味を認めるのが良心という言葉です。それゆえ、いろいろと意見の違う人が出てくるしかしプロセスを経たということ、互

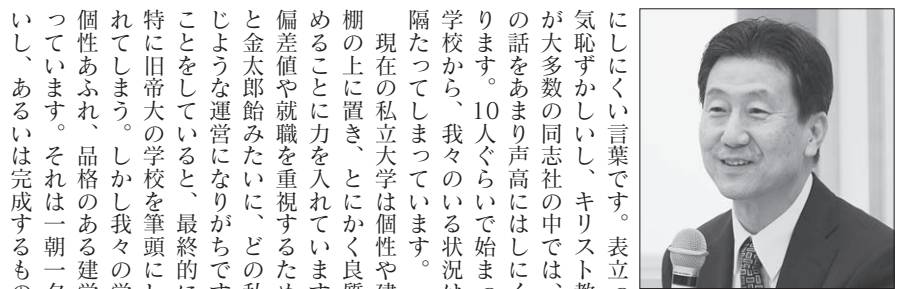
いに尊重し合えるのかなと感じます。

加賀 ●村田先生が、かなりうなずいておられます。

村田 ●こういうシンポジウムが開かれたのも、「良心教育」と言いながら、実は同志社の良心教育について正面から議論をする機会がなかったためだと思います。このような機会は大変大事です。ただ他方で、同志社大学で「良心とはこうあるべきだ」と言うべきではないと、私は思うのです。それが今まで問われてこなかったのは大変同志社らしいし、実はそもそもそこが良心だと思います。言葉に出さないかもしれないけれど、みんながずっと考え、思い悩んでいるプロセスそのものが同志社の良心であると。教育という営みもそうです。我々は「同志社」という、いつまでも続くプロセスの中にいる気がします。

各校の具体的取り組み

加賀 ●徐々に良心概念の核心に迫ってきたように思います。次に、これまで良心教育について各校でどのような取り組みをしてきたのかを伺いましょう。水谷先生から、法人全体についてお願いします。



水谷 誠
同志社理事長・
大学神学部長

にしにくい言葉です。表立って言うのは気恥ずかしいし、キリスト教徒でない人が大多数の同志社の中では、キリスト教の話をあまり声高にはしにくい空気もあります。10人ぐらいいで始まった同志社英学校から、我々のいる状況はあまりにも隔たってしまったと思います。

現在の私立大学は個性や建学の精神を棚の上に置き、とにかく良質の学生を求めることに力を入れています。受験生が偏差値や就職を重視するためです。すると金太郎飴みたいに、どの私立学校も同じような運営になりがちです。そういうことをしていると、最終的に国立大学、特に旧帝大の学校を筆頭に序列化されてしまう。しかし我々の学校は非常に個性あふれ、品格のある建学の精神を持っています。それは一朝一夕ではできないし、あるいは完成するものでもありません。

せん。先ほど「旅人」という表現を使いしましたが、常に少しずつでも啓蒙しながら、理解してくれる人たちを増やしていくことが必要でしょう。多くの教職員はその努力をしてこられたと思いますが、どれだけの成果が上がってきたかを考えると、少し物の見方、やり方を変えなければいけない時期だと思います。

村田 ●今また私の心の琴線にふれるような言葉がたくさん出ました。「気恥ずかしさ」や「序列」。また引用させていただきますと、サミュエル・ジョンソンという英文学者は「愛国心は悪党の最後の逃げ場所である」と言っています。私は愛国心にも、良心と少し似たものを感じます。愛国心という言葉やメンタリティーにもどこか気恥ずかしさみたいなものがないと、本物でないように思います。そうでないと原理主義に陥ってしまうの

ではないか。同志社にはよくも悪くも、そういう気恥ずかしさみたいなものがあるのだと思います。いま大学は国内外で様々な競争にさらされ、我々も序列の網から逃れられません。しかし同志社の人には、偏差値や大企業への就職、資格試験の結果をあれこれ言うことを、どこかで笑っているようなところがあります。なか。「まあええやん」と。この世の序列を疑い、笑う気持ちも大事ではないでしょうか。

大学の取り組みとしては、もちろんこれまでもいろんなことをやっています。チャペルアワー、アッセンブリーアワー、メディアーションアワー、Doshisha Spirit Week。同志社ゆかりの熊本、安中、会津を訪問するDoshisha Spirit Tourという企画もあります。同志社関連科目もたくさん設置されている。では例えばチャペルアワーにたくさんの人が集ってくれたら成功なのかというと、必ずしもそうではない。数では計れないものがあります。様々な小さな試みの間から、やがてシナジーが生じてくるのが同志社のいいところかなと思いますし、そう期待したいと思っています。

木村 ●同志社では中・高、小学校、幼稚

園も含めて、毎日が礼拝から始まります。常に物音が流れている現代社会で、沈黙の中には必修として「キリスト教学」という授業があり、これも素敵な時間です。入学式、卒業式もキリスト教式です。キリスト教イコール良心とは思いませんが、そこでメッセージとして語られることが生徒一人ひとりの良心に問いかけていく大切な時間です。さらに私たちが意識しないといけないのは、教員たちがそれ以外の科目で、同志社の掲げる「良心」と向かい合っているか、どういう教育を行っているかです。生活指導もそうです。学校が一人の生徒とどう向き合い、その子が過ちから何を学ぶかを、担任も突きつけられる。そのときこそ同志社の良心教育が問われます。

私は同志社が「良心教育」を看板のように掲げるだけでは満足しません。まるで白いご飯にふりかけをかけているようなイメージがするからです。同志社で言う「良心」は、聖書的に言うと「地の塩」です。塩は多すぎると辛くて仕方がない。ちょうどいい出汁の出ているような炊き込み御飯の方がいい。あまり前面には出てはいないけれど、隅々にしみわ



村田晃嗣
大学長

たっている。そういう良心教育に私は共感を覚えます。

大規模学園における リベラルアーツの実践

加賀●同志社女子大学についてお話ししますと、女子大はリベラルアーツを基本とする大学です。小学校教員の合格率や管理栄養士試験などの合格者数も大事です。しかしそれ以上に、地の塩、世の光として、自治自立の人民として生き、やがて日本や世界を良くしていくような女性を一人でも育てたい。リベラルアーツとキリスト教主義の二つ、これが同志社の良心教育の根幹です。

リベラルアーツとは、「からの自由」と「への自由」です。とらわれ、必要からの自由。解放です。縛られているところからいったん視座を解放することが、自分を自由にする。では、どういう解放の仕方があるかというときに、やはりキリスト教主義が出てきます。女子大では正課授業と正課外活動によって、キリスト教に関する多様な教育を行っています。正課では「聖書」が必修科目で、他に「キリスト教の歴史」「キリスト教文化論」「キリスト教世界の探求」「近代日本と同

志社」という同志社科目があります。「近代日本と同志社D」は講義に加えて実習があり、ポストン、アンドーヴァー、アーモストなどに行きます。正課外では、授業開催日に必ず30分間の礼拝を守ります。礼拝には全教員が関わることになっていて、奨励等も、クリスチャンではない教員や学生たちも頼まれれば行います。礼拝参加者は減ってきていますが、数よりも、続けることが大事だと私は思います。人生の中で悩み多き年代がやってきたときに礼拝を思い出してもらい、聖書をひもといてもらえればいい。他にもメデイテーションアワー、祈りの会、春秋のリトリート、群馬県の社会福祉法人で約1週間お年寄りたちと生活を共にするワークキャンプなど、様々な活動をしています。

では最後に、良心教育における今後の展望をお話しいただきます。

水谷●建学の精神を浸透させるのは啓蒙運動です。そのためにいろいろな仕掛けを学校や法人としてつくっていく必要があります。その第一歩としては、教職員の方々に、今日話したような物の見方について「100パーセント理解はできないけれども、反対はしない」という形で

のアーモスト大学」を創ろうとしました。アーモスト大学はアメリカの最も著名なリベラルアーツカレッジの一つで、学生総数は現在も1700人くらいです。一方、同志社は今や非常に大規模な学園になりました。ここにまた一つの「不一致」がある。この規模の中で、なおかつ教育の原点としてあったリベラルアーツの精神をどれだけ追求していくかという、答えの出ない不一致に我々は対応し続けなければならぬ。そういう意味では、これもお話に出ましたが、教師と学生、あるいは教職員同士で、どれだけ緊密な対話や人間関係を築いていけるかが非常に大事だと思います。

先般、職員研修の参加者に感想を書いていたところ、キリスト教や同志社の歴史についてそれほど知らないという声が続きました。教職員も、もっと知り、語り合う機会が必要です。他方で「良心」に関するアカデミックな研究も、大学のミッションとしてしなければいけません。良心というものを、神学、哲学、政治学、生命倫理など、様々な視点から学問的に探究するようなプロジェクトを今後展開していきたいと思っています。

木村●小学校校歌の歌詞は私の頭にもし



木村良己
中学校・高等学校長

浸透していくと、学生たちにも良い影響があるのではないだろうか。

村田●同志社小学校の校歌に「えらいひとなるよりも よいにんげんになりたいな」という谷川俊太郎さんの歌詞がありますね。同志社の教育の本質を言い当てているように思います。理由は簡単です。偉い人になるよりは、よい人間になる方が難しいからです。いわゆる社会的に偉い人は地位や組織を離れば偉くなくなりませんが、よい人間は普遍的に、よい人間です。逆に、よい人間になれたかどうかはいつまでも答えが出ない。永遠のプロセスです。だから我々はよい人間を目指す。そういう教育を我々は目指しているのだらうと思います。

今後の課題ですが、私にとって非常に悩ましいのは、同志社がリベラルアーツから出発したことです。新島襄は「日本

みこんでいます。しみこむというのは大事ですね。生徒は一日の大半を学校という空間で過ごします。そこに漂う空気というものは侮れません。この空気を学校はしっかり提供していきたい。知識や技術は教え込むことができて、命、心、良心はなかなか教え込めません。むしろそれは自ら感じ取るもの。生徒たちは同志社に漂う良心という空気を感知取り、今後の人生においてその香りを放っていくだろうという確信を私は持っています。

加賀●数年前、同志社校友会と同窓会との合同の会が群馬県であった際、保阪正康さんがお話をされました。東條英機や田中角栄など、戦前から戦後にかけて日本をつくった政治家に関するお話でした。保阪さんによると、その政治家たちの周りには同志社の影がなかった。それを「私はむしろ誇りに思う。同志社らしい」とおっしゃった。いわゆる偉い人を育てるより、「よい人」を育ててきたのが同志社であったと。私もこれは同志社教育の大事なポイントだと思います。本日は、どうもありがとうございました。

(2013年11月14日、大学今出川校地良心館107にて)

NHK大河ドラマ「八重の桜」によって、全国に同志社という学校の名前だけではなく、同志社のその名の由来や意味もまた知られるようになったことは大変嬉しいことだと思います。

さて、小さい子どもたちもいるので、ちよつと聞いてみたいと思います。みなさんは、自分の行っている学校が好きですか？（しばらくして、「はい、好きです」の声）

個人的には、同志社という学校に関わるようになった期間が、早いもので人生の半分以上になりました。ここにいるみなさんは、同志社を程度の差こそあれ、さまざまな理由で気に入っておられるのだと思います。おそらく、そう思っていないければ、こんな早くからこの寒い場所にはいないでしょう。そして、私自身もこの同志社という場や雰囲気が好きなのは間違いなんです。いったい、何が好きなんでしょう、そう皆さん問いかけてみてください。それは、私にとつては、自分を自分でいさせてくれるという心地よさなのかなというように思います。

簡単な言葉で言えば、やはり自由ということなのでしょうが、それは、表面的なものではなく、私たちの精神に働きかける自由だからこそ、心地よいのです。

レクチャー

創立者永眠の日 早天祈祷会 奨励

「同じ志を持つ」

エフェソの信徒への手紙4章1～4, 12～13節

同志社小学校教諭

中川 好幸



ただ、この自由というものは、取り扱いに注意が必要な厄介なものです。例えば、同志社では、各学校の中身については、本当に各学校に任されていることも多いでしょう。各学校で統一できていないことは、挙げればきりがありません。

また、同じ学校の中でもその学年のクラスによってやっていることが違うようなこともありますが、同志社というところには長年いる人にとっては、そのことをそれほど驚きはしないでしょう。また、同志社大学においてはおそらく、学部単位でさまざまな判断をなさることが多いのだと思います。

ある私立の小学校へ行った時のことです。が、学年で配布するプリントなどは必ず同じものにしなければなりません。クラスの見学物も同じ場所に貼る。そして、教え方や教える内容も、できるだけ学年で同じようにするというのを聞いて、びっくりしました。僕だったら、三日ぐらいでやめるかなあというように思いました。それは、内面の自由を侵されてしまうような危機を覚えたからです。

真宗大谷派では1998年に「バラバラでいっしょ」という言葉で浄土真宗の教えを現代に表現しようとされました。これは、すばらしいキャッチフレーズで、

みなさんも一度は耳にそして目にされたのではないのでしょうか。バラバラでありながら、それぞれの目指すところを持ち、一つになれるということでしょう。

《エフェソの信徒への手紙 4章1～4節》

「そこで、主に結ばれて囚人となっているわたしはあなたがたに勧めます。神から招かれたのですから、その招きにふさわしく歩み、一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。愛をもって互いに忍耐し、平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい。体は一つ、霊は一つです。それは、あなたがたが、一つの希望にあずかるようにと招かれているのと同じです。」

《エフェソの信徒への手紙 4章12～13節》

「こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、ついには、わたしたちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです。」

しかし、私たち同志社の姿を見ると、ともすれば、バラバラで一緒ではなく、バラバラでバラバラというように聞こえて随っているのではないか、そのように思われることもあるのではないでしょう。

最近、読んでいる本なのですが、New York Timesのベストセラーになっている、Mitch Albomという現代作家のThe first phone call from heavenという作品です。天国にいる近親者から、電話がかかってくる。それが、教会のメンバーにもあり、さまざまな価値観の転換を迫られるという面白い作品です。今、天国からの電話があれば、新島襄氏はどのようなことを伝えたいだろうか。どのようなことを私たちに問いかけるのだろうか。そのように考えさせられます。新島は、今の同志社の様子をみて、満足するのだろうか、あるいは、こんな学校は自分の思うような学校ではない、そのように言うのだろうか。

そのバラバラでバラバラに陥らないために、どこに共通の基盤を見出すべきなのでしょうか。私たちが同志社という同じ志を持つものの集まりとなるための、その同じ志とはどこにおくべきなのでしょう。

そこに例えば政治的なある信条や宗教的な信仰をもってきたときに、同志社というものは一つにならないということ、それは自明なことだと思います。おそらく、それぞれ個人のバックグラウンドや信条は異なりますし、同志社という総体として一致点をみつけることは難しいことでしょう。

「同じ志」とは何か？ということを考える時に、新島先生が「合同教会に反対した」ことをどうとらえるのか、ということとは私たちに大きなヒントを与えてくれると思います。プロテスタントの中で、キリスト教というものはいくつもの教派にわかれていきます。同志社がもともと援助を受けていたアメリカンボードは、会衆派と呼ばれる教派ですが、その会衆派と、今という長老派というグループが当時の日本のプロテスタント教会の二大勢力でした。同志社が会衆派の拠点であり、明治学院が長老派の拠点、日本の伝道をもっと大々的にすすめるべきであるという目的のもと、この二つの大きなグループが一つになると大きな力になるというのが合同運動で、大勢は海外からの宣教師も、そして、同志社では、熊本バング出身者を中心に合同に賛成でした。しかし、新島先生は、少数派となりながら

も、その合同に反対したのです。それは、この合同の取り組みが、弱者を切り捨てても断行するという、強硬なやり方ですすめられようとしていたことに反対を唱えていたからでした。

会衆派というのは、簡単にいうとツブダウンの組織ではなく、民主的な、すべてのメンバーが対等の立場の中で物事を決めていくという形式を持つ教派です。新島先生は、この会衆主義のもとで育ち、その民主的な方法がよいとは思っていませんでした。

ただ、新島先生が合同に反対したのは、会衆派というものがすぐれているので、他の教派がだめだから反対であるという理由ではありませんでした。1888年、明治学院の井深梶之助にあてた手紙では、「ただわれわれの信奉している共和主義である会衆教だけをさして、これだけが真正の教会であるとみなしているのではありません。長老派の諸教会から監督派、バプテスト派の教会にいたるまで、それぞれみな長所があるのですから、わたしはこれらは皆地上の有益な教会であると確かに認識しており、これらを尊敬し、これらと交わり、共に主の御旨を地上になさしめようとして、これら諸教会の間で非常に美しいスピリチュアル・ユ

ニヨンが行われることを希望しているところですよ。…」(新島襄全集3 675頁)とあります。自分たちが正しいからそれを主張するというのではなく、それぞれが、自由な立場を貫ける道は何か、その道が合同反対という選択であったかどうか。合同をすることによって、自分たちの良さが消されてしまう、自分たちの自由が侵されるという、本能的な危機感を感じたのであると推測できます。

また、海老名弾正宛にも同様の手紙を書いていきます。「…ある人はわたしのことを指して、狭い心をもったセクト主義者だと言っているが、私の取るところは自治自由平等主義である。セクトは何でもよい。…われわれは今の時代に義務を負っているだけではなく、今から千百年も後の時代の基礎をも据える義務を負っているのである。ゆえに、将来のためを図るならば、われわれの教会は極めて自由、極めてブロード、極めて簡易にその基礎をおくことである。どうかわたしの心情を洞察してほしい。われわれのグループの中に本当に自由の真価を知る者がわずかであるのには、わたしも閉口している」(新島襄全集3 726頁)。

こそが私たちが何よりも大事に合うべき同じ志ではないでしょうか。100%同じものがつながりあうのではなく、それぞれ個性を持ったものが、互いに認め合うという基盤をもった自由な存在こそ私たちが同志社人として最も見つけるべきものではないかと思うのです。多数決や形ばかりの一致がよい結果をもたらさないことがあるのは自明の通りです。教師は色々ですし、生徒も色々です。違いを認め合うというような言葉は、ともすればきれいごと聞こえます。そして、私たちの心の中には、やはり、この人さえいなければうまくいくのというような考えが全くなきとは言えないのです。新島先生は、「個儼不羈」な人材を大切にしたいと言われました。しかし、実際、そのような人物を相手にして、個人としては傷ついたに違いありません。正直に言えば、自分の言うことをきかんと欲し、そのような学生ばかりであつたら、また、同労者ばかりであつたら、新島先生の苦労はもう少し少なかったように思います。

しかし、そういう存在が自分のまわりにいることによって、私たちは謙遜する心やへりくだる姿勢を持つことができるということもあると思います。個人個人



がバラバラであるがこそ、私たちの存在意義があるのではないのでしょうか。違うものを受け入れるという基盤において、自分たちは一つである。そのように、私は、同志社の「同じ」ということを理解していきたいと思っています。

新島先生は、人からキリスト教とは何か?と質問されたらどう答えるか、という説教を晩年、仙台でしています。新島の答えは、「愛を以てこれを貫く」でした。愛を以てすべてを貫く道、これがキリスト教の教えであると語っています。新島先生自身が、キリスト教をどう理解しているかと言えば、この言葉に尽きるのです。(新島襄全集2 178頁)

今日取り上げた聖書のエフェソの信徒への手紙は4章ですが、その前の3章では、その愛の性質について書いてあり、新島先生の先ほどの説教は、その3章に基づくものでした。そして、今日のこの4章は、一致ということを書いています。霊による一致、それは先ほどの手紙でスピリチュアルユニオンと書かれていましたし、それは、「愛を以て貫く」というその愛における一致に他なりません。それは、形ばかりの一致ではなく、時には傷つくような経験を伴うことになるかも知れないものなのでしょう。

新島先生は、「人を辛抱強く受け入れよ」という言葉を残しています。「神のために、他人の悪を辛抱せよ。神はわれわれの悪を辛抱強く忍んで下さるから。神はただちに怒り狂って、われわれを矯正したりはなさらず、いろんな機会を用

いてわれわれを癒し、長い年月をかけてわれわれを清めて下さる。…大海を見よ、何と美しいことか。しかし海は、陸地から流れ込むたくさんの汚物を受け入れなくてはならない。海は汚物を受け入れ、それを浄化する。海のようにであることができるれば、幸福な人といわねばならぬ。」(新島襄自伝 371頁)

バラバラながら、同じものを見ようとするつながりを持つこと、そして、どのような立場にある少数者をも切り捨てることなく、「一人一人大切ナリ」というメッセージを私たちが表現していくことこそ、私たちが共に働き、共に学ぶ根本に据えるべきものではないでしょうか。そのような同じ志を持つものとして皆さんと共に歩みたいと心より願います。

(2014年1月23日、若王子山頂同志社墓地にて)

付記…新島襄の手紙の現代語訳は、野本真也同志社大学名誉教授の私訳を、許可をいただき、部分的に使用させていただいた。